市民活動サポートセンター いなぎ

ニュースレター

NO. 74

2023.12.20

発　行／NPO 法人市民活動サポートセンターいなぎ
事務局／〒 206-0802　稲城市東長沼 2112－1
稲城市地域振興プラザ 1F
TEL 042-378-2112　FAX 042-378-6971
E-mail：info@i-inagi-support.org
http：//www.i-inagi-support.org/

地域ビジネスで共感のコミュニティ

3 年以上に及ぶコロナ禍で、従来の地域コミュニティが活動の縮小や停滞を余儀なくされる中、子育て世代のママさんたちが主導して、地域への関心や問題意識を共有する仲間とともに新たなコミュニティを創る活動が芽吹いてきています。

今回は、地域ビジネスを通じて新たなコミュニティづくりに取り組んでいるお 2 人をお招きして、対談形式でビジネスや地域への思いなどを伺います。　（司会と構成：種田匡延）

司会　今回は、稲城の名産品を活かした地域ビジネスを展開しながらコミュニティづくりにも取り組んでいる中倉美奈子さんと山本友貴さんにご出席いただきました。まずは、お仕事を始めた経緯などをお話しください。

地域のために何かしたい！

山本　もともと私は、金融機関に 12 年ほど勤めていたんですが、子どもの「ママ、お仕事辞めて」という一言に仕事を続ける理由を見つけられず、もっと子どものそばにいられる働き方、家庭と仕事を両立できる働き方ができないか夫婦で話し合い、退職を決めました。そして自分でカフェを始めようと、パートタイムでパン屋やカフェで働きながらシェアキッチンを探していたのですが、あるとき知人を介して、後にうちの役員になっていただくことになる梨農家の川島さんとお会いし、自分の考えを話したら「こんなものもあるよ」と梨のドライフルーツを食べさせてくれたんです。そのとき、形や色が良くないために正規品として販売できない果実でも、加工することで価値を高めることができるドライフルーツの可能性を感じました。

私は常々、子育てで分断されてしまう女性の社会参加や経済力を、子育てしながら少しずつでも継続していけたら良いなと思っていて、会社という“箱”を作ればそれが実現できるのではないかと考えていました。そのために、正規品として販売できない梨やぶどうなどを活用してドライフルーツという商品を作り、それに IT やデザインなどメンバーの得意分野を組み合わせれば地域経済を生み出せる

中倉美奈子さん

長崎県出身、稲城市に住んで 10 年。地域に畑がある風景を残したいという思いから、地元食材と米粉でつくるおやつ屋さん「こめのこ」を立ち上げる。フレグランスフリーの子ども服交換会「ふくふく交換会」や地域のマルシェなども企画運営している。座右の銘は「為せば成る為さねば成らぬ何事も」

こめのこ
インスタグラム

山本友貴さん

神奈川県出身、稲城市に住んで 9 年。発色や形、傷などから正規品として販売できない稲城名産の果実を活用してドライフルーツを製造・販売する「ココロコ株式会社」を知人と設立。現在は同社の代表取締役を務めるかたわら、行政書士としても活躍している。座右の銘は「冬来りなば春遠からじ」

ココロコ
インスタグラム

ココロコが作る稲城産梨のドライフルーツ「ピース オブ プレシャス」

んじゃないか、子育て中のお母さんたちの働く場とか居場所を作れるんじゃないかということで、「ココロコ株式会社」を2020年に立ち上げました。

中倉　私たちの「こめのこ」は、2021年にスタートしました。南多摩駅近くで上野さんご夫妻が営んでいるレストラン「オルトラーナ」がお休みの日に、キッチンの設備を借りて地元産の野菜やフルーツを使った蒸しパンなどを作っています。

メンバーは私を含めて4人いて、上野さんのお店で集まったときに「稲城の農作物がもったいない」という話が出たんです。稲城には、頑張って野菜を作っている農家さんがいらっしゃるのに、店頭などで消費者の目に触れる機会は少なく、ロスもたくさん出るんだそうです。そこで、そういう農作物を使って、地域に貢献できるような商品が作れないか、何かこのチームで面白いことができないかと考えました。

ちょうどその頃、私が米粉マイスターの資格を取ったので、“米粉を使って日本の田畑を元気にしながら、子どもも大人も一緒に頬張って、笑って楽しめるものを作ろう”ということで米粉の蒸しパンにたどり着き、オルトラーナのキッチンをお借りして作って、店内で販売することから始めました。

子育て世代のニーズに合わせて

司会　オルトラーナが触媒であり、インキュベーション施設でもあったわけですね。

中倉　何か始めようというときに、最初からどこかにキッチンを借りるのはハードルが高い。子育て世代のお母さんは、子どもの成長につれてライフスタイルも変化していきますから、どこまで続けられるか自信がない中で、いきなり大きな投資が必要なスタートは切れません。その時にオルトラーナが定休日や時間外にキッチンを使わせてくれて、最初の突破口を開いてくれたのは本当にありがたかったです。

司会　山本さんは、会社を地域のお母さんたちの働き場所や居場所にもしようということでしたが、どのようにしてお母さんたちが集まってきたんですか。

山本　その人と共通の友人がいたりとか、保育園や幼稚園を通じた子育て世代の知人って結構いるものなので。それと、そういう方たちの口コミですね。

司会　子育て世代のお母さんたちも、働くタイミングとか条件が合えば、働きたい人は結構いるんですね。

山本　そういうニーズはあると思います。うちでも、午前10時から2時間半だけ働いてもらうなど、色々と試してみました。そもそもドライフルーツを作ろうと考えたのも、子育て中のお母さんの働く場をイメージしたとき、果実の加工に高度な技術力が要るわけではないし、加工から販売までの期間を長くとることもできるので、働く人に合わせて仕事ができるのではないかというところからでした。

司会　中倉さんからは、農家さんが作った農作物が市場に出てこなくてもったいないという話がありましたが、そもそも何故その農作物に目付けたのですか？

中倉　自分たちが暮らす稲城の魅力をもっと伝えたいね、と話したときに「自然」「風景」という言葉がメンバーみんなから出てきたんです。家の近くに梨農園や畑があって、駅から歩いて10分で里山に着いちゃうような環境など東京ではほとんどない。そんな稲城の魅力を伝えようとしたとき、農地ってすごく大事で、「もしも稲城から農地がどんどん無くなっていったら、稲城の魅力って激減するよね」って話していました。

でも私たちは農家ではないので、農地を守るために私たちにできることは何だろうと考えたら、採れたお野菜を残さずしっかり食べて、できるだけ農家さんを応援するのが一番じゃないかと話したんです。

私たちはみんな子どもがいるんですが、子どもが育つ環境には豊かな緑があってほしいという思いがとても強くて、自然が多い稲城で子育てしたいという人は多いんです。この環境を子どもたちや孫の代まで残してあげたい、子どもたちの故郷であるこの環境を私たちが守っていきたいというのが、こめのこのスタートでした。

共感と応援のコミュニティ

司会　2人とも、材料の仕入れ先が農家さんで、お店での販売に加えて地域のイベントやマルシェで直接販売もされていて、農家さんやお客さんとの関係も事業を中心とした一つのコミュニティなのだと思います。ただ2人の場合、仕入れ先やお客さんとは、普通の会社のようなビジネスライクな関係じゃなくて、「ファン」という感覚に近い、お客さんとも農家さんとも互いに応援しあっているファン同士のような温かい関係のように感じます。

中倉　私は全てにおいて「win-win」という言葉が好きなんですが、どちらかが一方的に頭を下げてお願いするような関係はストレスになるから、お互いに「いいね」でつながれる心地良い関係が理想だと思っています。だから、農家さんにもビジネスライクな発注は絶対しないようにしていて、農家さんとつながっているメンバーから「今こう

稲城産野菜や果実を使った「こめのこ」の米粉蒸しパン

いう野菜や果物がたくさん採れてるよ」と報せがあると、「じゃあ、こういう蒸しパンが作れるね」とか「それだったらジャムにしよう」って栄養士のメンバーが考えて、仕入れさせてもらったものは余すところなく使うことを大切にしています。

お客さんに対しても、「地域の農業を守って、採れたものをみんなで美味しく食べよう」という思いに共感してくれる方がリピートしてくれれば嬉しいなと思っています。私たちの信念を大切にして、無理な万人受けは狙っていません。

最初は蒸しパンだけでスタートしましたが、アレルギーのお子さんをお持ちのお母さんから「米粉で誕生日ケーキを作れないか」ってご相談をいただいて新商品のシフォンケーキが生まれ、別のお母さんから「クリスマス等に予約注文ができないか」っていうご相談をいただいて予約注文制を始めたり、求めてくれる方のご要望にしっかり応えながら商売をしているので、私たちとしてはwin-winだと思っています。

山本　私は稲城に住んで9年目なんですが、近所の梨農家さんで梨を買うようになって農家さんと仲良くなれて、娘がその場で梨を食べさせてもらったりする関係になれたんです。そして、食べたらすごく美味しい！

だけど今、どんどん梨農家さんが減っているように見えて、私がドライフルーツを作ることで何が変わるわけではないけれど、「何か自分にできることを」ということで、梨を活用した活動をしてみたい思いがありました。それでココロコを始めるとき、会社のチラシを持って「こういう活動をしたい」って農家さんを一軒ずつ訪ねて回ったんです。そんなことから多分、仕入れ先の農家さんは共感だったり応援する気持ちを持っていただいているのではないかと。仕入れ先というより、支援者みたいな気持ちでお付き合いいただいていると感じることが多々あります。

お客さんについては、マルシェなどでお会いする方は結構リピーターが多くて、「いつもペアテラスで買っているけど今日はこっちに買いに来たよ」とか「ちゃぼさんでいつも買ってます」とか言っていただいて、うちのドライフルーツの味を覚えていただきつつあるのかなと思っています。

司会　そういうお客さんは、普段からSNSとかでココロコやこめのこのスケジュールをちゃんとフォローしてるんだよね。「このイベントに出店するんだ、じゃあ行ってみよう」なんて。

中倉　わざわざ来てくれる方いますよね、「インスタグラム見て来たよ」とか。

山本　そうですね。ありがたいです。

子どもたちの故郷の良さを伝えていく

司会　2人の話を伺っていると、稲城のまちへの愛情がとても感じられて、そういう「地域のために何かしたい」っていう思いが、多くの人の胸に響いているんだと思うんですが、何故、稲城に対してそういう思いを抱けるんでしょう。

中倉　稲城は子どもたちの故郷なので、子どもたちが将来、社会に出て「実家はどういう所？」と訊かれたときに、「すごく素敵な場所だよ」って言ってもらいたいと思っています。

稲城は自然が豊かで農地も多く素敵な場所ですが、子どもが育つうえでは、親がどういう生き方をしてきたかも本当に大事だと思っています。地域のために何かしたいと思って地域の仲間と活動をして、コミュニティでつながれているから、どこへ行っても挨拶しあえる相手がいて、週末も色々な行事に参加したりイベントに行ったりして稲城で過ごすことが多いし、地域の色々な人が関わって育ててもらったという感覚。それは、親が地域コミュニティにつながっていたからだということが、子どもたちが成長して故郷をイメージしたときに分かると思うんです。

子どもには、地域に育ててもらった記憶が自分の誇りとなるような育ち方をしてほしいし、親自身もそういう生き方をしないとな、と。その生き方の先に、稲城を盛り上げる活動がつながっているという感じですね。

山本　私は会社員で働いていたときと今稲城で働いているときでは、まちの景色が全然違って見える気がします。稲城に長くいると、色々な立場の市民の人たちが、それぞれのテーマで活動しているのが見えてくるんですが、昼間は仕事で稲城を離れている人だと、外に目が向いて地元の良さが見えないので、地元に期待しない感覚になっちゃいます。

でも、住環境が静かで、子どもがちゃんと学校に通えてればOK、保育園に入れればOKというご家庭でも、無農薬の野菜が食べたいとか地産地消に関心があるとか、地元産の新鮮な野菜や果物を食べたい人っていると思うので、そういうことができる稲城の良さがもっと多くの人に伝わっていくと良いと思います。

司会　わがまち稲城の良さを仕事を通じて伝えていく役割が、稲城で仕事をしている私たちにはあるんだと思います。お互いこれからも頑張りましょう。今日はどうもありがとうございました。

市民活動サポートセンターいなぎ 20周年を祝う会を開催しました

市民活動サポートセンターいなぎの「20周年を祝う会」を、去る8月27日に地域振興プラザで開催しました。

当日は稲城市長・市議会正副議長をはじめとする行政・議会関係や、商工会・社会福祉協議会など関係団体から多くの来賓に参列いただき、これまで金曜サロンスペシャルでお話いただいた話し手の方々もお招きして、盛大な祝賀会となりました。また、元桜美林大学教授の荒木重雄氏が「稲城の市民活動」と題して記念スピーチを行い、明治時代から連綿と続く稲城地域の住民活動の歴史を紐解き、参加された方々は市民活動への思いを新たにされました。

おじゃまします

平尾ベルの会

平尾地区を拠点に「地域の皆さんに必要とされるときに、出来ることをお手伝いしながら、皆さんと楽しく優しく暮らせること」を目指して活動している「平尾ベルの会」(代表・末松妙子さん)。1990年に発足して今月で満33歳になります。

活動を始めたきっかけは、大病を患いながら寂しく一人暮らしをしている方を支えるため、地域の仲間でグループを作ったことから。日々の暮らしに支えを求める人からの「ベルが鳴ったら、すぐに駆けつける」という思いを、会の名称にしました。

会の立ち上げ後は、デイサービスを利用する高齢者の送迎、高齢者施設での食事・ゲーム・健康体操など活動の手伝い、喫茶コーナーの運営、社会福祉協議会の依頼を受けて日々の生活に支援が必要な家庭への手助けなど、地域で支え合うため様々なボランティア活動を行ってきました。

3年余りにわたったコロナ禍を経て、現在は第1・3火曜と第2・4木曜に平尾団地の集会所でお茶のみ会、第1・3木曜に第三文化センターでピアノで歌う会を開いています。

ピアノで歌う会

お茶のみ会

ピアノで歌う会にお邪魔すると、部屋の扉を開いた途端に20人ほどの元気な歌声が溢れてきて、若々しい声にちょっと圧倒されました。この会は、大病を患って後遺症の残るピアニスト・宮良さんのリハビリも兼ねているそうで、最初の発声練習から30分間以上、歌もピアノも休まず次から次へと歌い続けます。途中に小休止を挟んで1時間半以上、和やかに歌い続ける皆さんの体力と集中力に驚かされました。

当日唯一の男性参加者（そして多分最年少）の町田さんにお話を伺うと、「皆さんが若い頃に歌っていた曲が多くて、皆さんそれぞれ思い出を重ねて歌っている感じがします。青春時代をもう一度謳歌されているようで、感慨深いです」と話してくれました。

また、お茶のみ会は、お茶とお菓子を傍らに体操・折り紙・麻雀・百人一首などをしたり、オカリナや三味線などの演奏を聴いたり、話し手を招いて講話を聞いたり、みんなでおしゃべりをしながら，日々の暮らしを豊かにするひと時を過ごしています。取材でお邪魔したときは92歳になる斉藤さんのお誕生会を兼ねていて、「ハッピーバースデー」を歌ったり、三味線の演奏を聴いたり、そしてあちらこちらでおしゃべりに花を咲かせていました。

参加されていた中野さんと藤巻さんにお話を伺うと「ここに来ると地域のみんなが今どうしているか分かって安心できます。食べたりおしゃべりしながら、みんなで時間を共有できる、こんな気楽な集まりがいつまでも続いてほしいです」と話してくれました。

「かつて、稲城の人たちの結びつきはこんな感じだったんだろうな」と思わせてくれる、温かなつながりの「平尾ベルの会」でした。